

もてあそぶ人は、何の珍しきこともなく、すぐれたる徳もなき常の磁器を千金萬金に買ひ取り、上もなき寶と思ひ、させることも無き人の作れる竹の筒、竹の籠などを、百金にも買ひて、世に珍らしき物と思ふは、大なる惑なり、

〔老の波〕茶器といへば高料なる物と心得る、いと笑ふべし、高料を好まば、いかけ地螺鈿の臺に、こがねの茶椀のせたらんかた遙にまさるべし、宗易のかたへ或農夫來りて、月ごろ日ごろ財をたくはへて、よき茶器を得侍らんと心がけぬ、此金もて茶器を買ひ給はれといひけり、後の日農夫來りければ、かのがねにて買置たりとて、白布多く出したるを、農夫驚きて是は如何にと問へば、茶巾だに新らしくば、いかほども客は呼ばるゝもの也、とはいひけるとぞ、いと感すべき事也、今宗易が書きたるもの、又は持ちたる器ものゝたぐひまで、千々のこがね出してかひえてんとするは、宗易を貴ぶゆゑに、かくはまたふにてありけり、左程にも貴びまたは、千々のこがね出して、其手澤の存する器をかはんよりは、まづ此茶巾の事いひたる金言を我物とすべし、この金言を我物とすると、手澤の品を我物とすとは、いづれが宗易の心に叶ひぬらんと思ふにや、かの遠州政一小堀のいはれしにも、器は新らしきをすと、古き口にもあんなり、然るに茶は事そげて奢らぬをせにすればこそ、世の人のこは古きとて捨侍る器物も、かの數奇者は捨てずして、新らしき器物よりも、心あたらしくつかひぬるを、眞の數奇者といふとをしへられけめ、今此意ある人だに稀れなり、持傳へし器ならばさらなり、されど新らしき器得るほどの事いできなば、猶夫れをもうちまじへてこそ有るべけれ、殊に今の人は茶とだにいへば器ものよと心得、その器よといふも、實にわがよきと思ふにもあらず、唯人まねして、此頃は青磁の香合もてはやすなり、堆朱は人々好まざれば、茶會に用ゐるがたしと、皆世上に雷同瓦鳴して、いはゞ婦女の髪のさま、衣服の色目、世の流行を心として、いさゝかも我實見なく、世もてはやせばよきと思ひ、もてはやす事